

# オリーブの木

No. 86

2022年 11月



2022スタディ・ツアーでの一コマ。ラサール校（エルサレム）の小学校5年生クラスを訪問。  
生徒たちは鶴や飛行機の折り紙を習って大喜び！ 担任は後列中央のクレール先生。

支援者の皆様をはじめ多くの方々のご協力で3年ぶりに実施することができたスタディ・ツアー。参加者の心に最も深く刻まれたのは感謝の念だと思います。

現地の人々や訪問先でのホスピタリティー、イスラエル人・パレスチナ人が共に集った親睦会での交わり、現地在住の先輩たちとの出会いなどに、若者たちはみな感動しました。とくに当法人現地スタッフ、ヤクープ・ガザウィ家の親戚ぐるみのおもてなしが心に沁みしました（この一家はもう15年以上、様々なおもてなしをしてくれています）。素晴らしい家庭料理を何度も楽しむことができ、また両親が交代で自家用車を運転してくれたので、毎日の移動もスムーズにできました。物価高や円安に悩まされ「円安きつい」という名のLINEグループまで作っていた学生たちは大喜びでした。実の息子や娘以上に手を差しのべてくれたヤクープ家を通して、「平和」は日常の思いやりから始まるのを知ることができました。

当法人のスタディ・ツアーはこの度も「若き平和の働き人」の心の宝となって、皆様のご支援を有意義に生かすことができたと確信しております。

心より感謝を申し上げます。

井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502

Email [ispalejpn@gmail.com](mailto:ispalejpn@gmail.com)

TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 **00180-4-88173** 加入者名  
「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<https://seichi-no-kodomo.org>

# スタディ・ツアー 2022 の報告と感想

## 3年ぶりのスタディ・ツアー、皆様のご支援に感謝！

当法人は8月24日から9月4日まで、3年ぶりとなるイスラエル・パレスチナへのスタディ・ツアーを実施することができました。

2020年以来のコロナ感染拡大で何度も延期を余儀なくされておりましたが、イスラエル・パレスチナ紛争の解決が厳しさを増す中、たとえ一粒でも「平和の種蒔き」の手を止めてはならないとの信念から、敢えて実施を決めました。円安の進行による財政面の困難も、将来への投資と見きわめでの決断でした。

数度にわたる事前研修を積んで臨んだ6人の参加者はそれぞれ大切なものを学び、とくに現地の人々との交わりに大きな喜びと感謝を抱いて帰国しました。参加者一人ひとりの成長に期待しております。

この旅を可能にしたのは支援者の皆様はもちろん、現地の方々、特に私どもの現地スタッフ、ヤクーブ・ガザウィ家の献身的な協力があればこそです。

さらに帰国後の報告会にはNHK解説主幹の出川展恒氏もご参加くださり、最新の情勢を踏まえてコメントをくださいました。(p.5参照)

皆様のご支援に心から感謝申し上げます。

## 私の進路を明確にしてくれたスタディ・ツアー

高橋 彩子 (大学4年)

私がイスラエル・パレスチナの紛争問題について学んできたのは、平和について考え、どのように平和に貢献していくかを明らかにしたかったからです。2019年「平和の架け橋プロジェクト」への参加、その後の3年間の事前研修、約半年の当法人でのインターンを経て参加したこのスタディ・ツアーは、今までの学びの総まとめになりました。結果として「環境分野の課題解決を通して平和に貢献する」という自分なりの答えを見つけ、大学院への進学を決めました。また、私生活では、学びの一つである「人とつながることの大切さ」を重視していきたいと思っています。

訪問先で現地の人やガイドから話を聞くことで、



パレスチナ自治区：ジェリコの町の道端のゴミ

私はあらゆる分野に無数の問題が存在することを知りました。変化を起こすためには全体を見渡すだけでなく、これらの小さな問題一つ一つに取り組むことも不可欠だと強く感じました。これが、ジェネラリストではなくスペシャリストになる道を選ぶことにした理由です。専門分野として「環境」を選んだのは、ツアー中イスラエルからパレスチナに入った途端に道路や建物、その周辺のゴミ管理の様子が一変して、雰囲気まで全く違うものになるのを感じたり、数年前と比べ明らかに小さくなった死海を見たりして、環境やその管理の影響の大きさを実感したからです。「環境問題」はかねてより興味のある分野でもありました。

人とのつながりを今後も大切にしたいのは、「プロジェクト」でつながることが個人レベルの平和構築を可能にすると学んだ上に、今回のツアーでそれが長期的に続くことや、その「つながり」に日本人である自分の意味を実感できたからです。現地での交流会には、最長で10年前までの参加者も集まり再会を喜び合いました。移動制限のためお互いの居住地に行けないイスラエル、パレスチナの友人にそれぞれ会った時には、私が写真を共有したことをきっかけにメッセージアプリで会話が始まり、間接的に3者同時に再会できたような気持ちになりました。

ベツレヘムで、現地学生から「パレスチナの事はここに来なければわからない。来てくれてありがとう。」と言われました。やはり来るべきだったし、3年間待ってでも来てよかったと思えるツアーでした。最後になりましたが、主催者の聖地のこどもを支える会、支援してくれた方々、一緒に学びを深めてくれた参加者のみんなに改めて感謝します。

## 苦しんでいる人々の役に立てる活動を

清原 崇 (大学4年)



この貴重なスタディ・ツアーに参加する事ができたのは、長年に渡って活動に尽力してくださっている弘子さんと理事の皆様、現地スタッフのヤクープとその家族、OB、OGの方々、支援者の方々、これら全ての方々の紡いできた糸があったからこそだと思います。心から感謝いたします。そして自分が将来その活動を担う一人になることでこの恩を返し、次の世代へと引き継ぎたいと考えています。

実際に現地を訪れて見て、イメージしていた複雑さの度合いが気の遠くなるような程度だとわかり、改めて自分に何が出来るのかを考え直すきっかけになりました。味方であるべきパレスチナ政府の腐敗、簡単に海外に行けない事実、チェックポイントの日常、賃金格差、イスラエルの占領政策、SNSなど言動の管理、不十分な福祉など、さまざまな場面で不平等を抱えて過ごすパレスチナの人たちの事実を知り、言葉に詰まりました。

また、聴覚障害児の「エフェタ学院」と名誉殺人を免れた子どもたちの施設「飼い葉桶乳児院」を訪れた際、社会では障害者に対する理解と受入れが進んでおらず、就職も困難で差別に苦しんでいると聞きました。また、親がいない子供は結婚すら容易ではなく、職業も兵士やボディーガードなど殆ど決まっているそうです。将来きっと自分が生まれてきた意味が分からず、苦しむにちがいないこの子たちのために何かできればと、私は思いました。

しかし、こんなに複雑な状況を第三者がどうやって変えられるのだろうか。他にインパクトのあることはできないのか。いや、そもそも世界情勢に影響力のない) 何の影響力もない個人(である第三者)がこの問題に関わること自体意味があるのか……。現地の状況を知れば知るほど、そんな疑問が湧いてきました。

最終日、ヘブライ大学でお会いした日本語学科の教授にこの疑問をぶつけたところ、第三者の存在意義というのを教えてくださいました。「日本人としての世界観や価値観からこの問題を見ることは非常に大切。

新しいアイデアが必要だから」この言葉を聞いて、自分がやる意味はあるのだ、と勇気を頂きました。

今後、活動を続ける中で大きな影響力を持てると嬉しいです。これから、少しでも苦しんでいる人々のお役に立てるような活動を一生懸命続けていきたいと思います。

## ツアーでの気づきを深めること

三島 陽 (大学2年)



スタディ・ツアーでは、現地滞在中、様々な学校訪問や大学生たちとのディスカッション、対立が表面化している「分離壁」や「難民キャンプ」の見学など、多くの活動をしました。この体験をとおし、私はこのNPOと同様のプロジェクトが世界の多くの場所で行われていること、多くの人たちが平和の担い手として活動に携わっているのを知ることができました。

いろいろな出会いの中で、以前に当NPOの「平和の架け橋」プロジェクトに参加したことがあるパレスチナ人から、次のような体験談を聴きました。

「それまでのイスラエル人のイメージは、皆、検問所で、軍服を着て銃を持っている人だった。」「しかしプロジェクトに参加して、互いの日常について語り合い、互いをより深く知りあったことで、イスラエル人も軍服を着ていなければ普通の人間であるということを理解した。」「そこで知り合った仲間たち(イスラエル人も、パレスチナ人も、日本人も)とは、今も連絡を取っている。話し合いを続けること、つながりを持ち続けることは重要だ」と。

出発前、事前研修の段階から、「平和をつくる」ためには「小さなことから始めること」と言われていましたが、現地でも多くの人が同じような考えを持っていることを知り、「草の根活動」を続ける大切さをあらためて実感しました。

プロジェクトに参加した人たちは、パレスチナ人もイスラエル人も互いに対するイメージを変えることができるでしょう。しかし、そのような機会に恵まれる人はまだまだ少数です。参加したことのない人にとって、「イスラエル人は検問所にいる軍服を着て

銃を持った人たち」、「パレスチナ人はいつ爆弾やナイフで襲ってくるかわからない人たち」というイメージを変えていくのは、容易ではないと思います。しかし、双方がお互いのイメージを少しずつでも変えていければ、確かにそれは平和への第一歩です。だから、私たちがプロジェクトへの参加者が増えるよう努力し、さらにこれまでの参加者たちがその体験を広めてゆくことは、小さいながらも重要な活動であると感じました。

私は出発前に、決意表明として「自分が平和のために何ができるか、何をしないといけないのかを考え、他人に伝えられるようになる」という目標をあげました。自分の体験や気づき、考えたことを他人に伝えていくことが、私にとって今できる「小さいこと」の一つであるように思います。イスラエルとパレスチナの問題について考える人が少しでも増えてくれるよう、どのように考えて伝えていくかが、今私に与えられた宿題です。この宿題をより良いものとして仕上げられるようこれからも考え、行動したいと思います。

最後になりますが、今回のスタディ・ツアー実施のために支援していただいた皆様に感謝申し上げます。この貴重な経験を活かせるよう頑張ります。

## さらに学習し、再び訪れよう

江口 真由 (大学2年)



帰国して2ヶ月が過ぎようとしている。今でも自分がイスラエル・パレスチナにいたことが信じられないし、同時に、経験したことを鮮明に思い出すことができる。机に向かっていただけでは得られなかったたくさんのことを学んできたが、私の頭の多くを占めているのは平和に対する思いである。「平和を願う対話の旅」というツアーの名前の通り、平和につながる多くの学びを得た。イスラエル・パレスチナでの経験から、平和について多角的な視点を得たように感じる。

スタディ・ツアーを通じて考えたことが2点ある。まず、平和とは誰にとっての平和であるのかということ、次に、平和な環境を作るとはどういうことかということだ。

1点目に関しては、国の政策が人々にとっての平和であるとは限らないのではと感じた。現地の方々の話を聞いて、国民が望んでいることは国の政策と同じではないと強く感じるが多かった。わたしたちが日本で得られるニュースはイスラエルやパレスチナの国家や政治団体の行っていることがほとんどだろう。けれども、実際には武力行使を望んでいない人々は多くいるし、イ・パ両国間の平和を目指している人も多くいた。これらの事実をより多くの人に知ってもらいたいと思うと同時に、平和を望む人々の支援をしたいと感じた。

2点目については、イ・パそれぞれの立場によってによって実現したい社会が異なっていることと、彼らが共に暮らしていく社会を作ることの複雑さを考えるきっかけになった。イスラエルやパレスチナと聞くと、どうしても武力的な側面をイメージしてしまう。しかし、本当に重要なのは、自爆攻撃や占領行為にどのような背景・理由があるかを考えることだろう。全ての人々の間で対話をし、一人でも多くの人の幸せを実現できる新しい社会を作る「平和構築」の重要性を理解した。

スタディ・ツアーでの学びは私に新しい視座と膨大な課題を与えてくれたと思う。事前研修や大学での講義で学ぶ以上に現実には複雑で、滞在中に抱いた数多くの問いにまだ答えを出せないでいる。それでもこれらの複雑な課題に向き合うきっかけを得られたことや議論できる仲間ができたことは、私にとって貴重な財産になった。今回学んだことを踏まえてさらに学習し、再びイスラエル・パレスチナを訪れようと思う。

## 支援金の自動払込みサービス

ご好評を頂いている自動払込みサービス。まだの方はぜひご利用ください。

- \* 郵便振替、クレジットカード、どちらでも可能です。
- \* 銀行や郵便局へ、毎回払込みに行く手間が省けます。
- \* いつからでも、いくらからでも簡単に始められます!

お申込み・お問合せは

当法人事務局 **03-6908-6571**

または **042-636-9218** (中山)

# スタディ・ツアー報告会から

2022年スタディ・ツアーの報告会が10月21日、東京都新宿区の聖パウロ若葉修道院で、対面とオンラインによる参加で開かれました。ツアーに参加した学生たちの報告の後、出川展恒NHK解説主幹による報告への感想と、現地の政治状況についての解説がありました。ここでは出川氏のコメントと解説を中心に伝えします。

(文責：村上宏一・当法人理事)

出川氏はまず、現地に行ってみないとわからないことがあり発見もあるとして、イスラエル、パレスチナの若者たちも日本人と同じ考えや感じ方を持っているとの印象を受けたという報告にうなずき、平和って何だろうと改めて考えさせられたとの報告には、次のような話をしました。

パレスチナ自治に導いたオスロ合意をめぐる取材の中で、平和に込めた意味や目指すゴールが立場によって異なることを知った。イスラエル側は自国の安全を守ることに注力し、パレスチナ側との平和とは仲良くすることではなく、安全を得るためなら独立を与えてもよいという考え。パレスチナ側は、イスラエルによる占領のもとで人間としての尊厳を持っていない状況を脱するために、自分たちの国を持って尊厳を確保したいと考える。

また、イスラエル、パレスチナ双方の若者を日本で交流させるNGO活動に触れ、現地ではお互いに会話をする機会がほとんどなく、日本で初めて対話する中で、互いに同じ人間として話せたこと。そして相手がテロを仕掛けてくる、あるいは鉄砲を持って自分たちを抑圧するモンスターというわけではないことを実感できたことに意義があることを強調しました。

そのうえで、現地の政治状況の解説をしました。概要は以下の通りです。

## 大規模軍事衝突の懸念

このところ東エルサレムやヨルダン川西岸で、連日のようにパレスチナ人とイスラエル治安部隊との衝突が起きている。2022年1月以来のパレスチナ人の死者数は、国連報告によると85人にのぼる。衝突の背景には、パレスチナ側に武器が拡散してい

ることがある。パレスチナ側に行政と治安の権限があるA地区に、シリアなどから武器が入って来て武装化が進んでいるという。イスラエル側によるテロの犯人捜し、拘束が強まり、これにパレスチナ側の武装勢力が対抗するという図式。この武装集団は、イスラエルに対する2度目の抵抗闘争＝インティファダ（2000年7月～05年2月）でパレスチナ自治政府の治安部隊が崩壊したのを受けてできたものだ。独立国家が実現せず、ユダヤ人入植地は増えて将来の領土となるべき土地が減り、自治政府は腐敗するなど、パレスチナ人の中には絶望が広がっている。非常に危険な状況で、ガザであったような大規模な軍事衝突がいつ起きてもおかしくないといえる。

## 二国家共存しかない

一方イスラエルでは、11月1日に3年半で5回目となる総選挙が実施される。内政が混乱する中、右傾化が進み、ユダヤ人の利益だけ考える傾向が強まっている。パレスチナ国家を、という意見は弱まり、和平の可能性は小さくなっていきそう。和平が報じられなくなっている今、どうすべきなのか。

まず暴力の鎮静化が欠かせない。二国家共存論の復活は近い将来は望めないかもしれないが、その必要性を再認識すべきだ。そして現状凍結、特に入植地の拡大を止めなければならない。そうでなければ、パレスチナはイスラエルの占領下に置かれ続けるか、ガザのように壁で封鎖されてしまうことになりかねない。パレスチナを取り込んだイスラエル一国になったとしたら、パレスチナ人は二級国民の境遇に置かれ、かつての南アフリカのようなアパルトヘイト（人種差別）国家となり、イスラエル独立宣言に謳う民主的國家の理想は失われてしまう。二国家共存の実現は気が遠くなるほど先のことになるかもしれないが、それしか道はない。



# 元首相の国葬 多くの国民・外国要人が集い追悼した

村上 宏一（当法人副理事長・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

今から27年前、1995年の11月4日、イスラエルのラビン首相（当時）が暗殺されました。93年にイスラエル・パレスチナ間で結ばれた和平合意をめぐり国論が割れる中、和平集会の会場で和平に反対する宗教右翼の若者に銃撃されたのです。

## 和平集会の場で撃たれる

和平集会でラビン首相はめずらしく、合唱に合わせて壇上で歌っていました。そして会場を去ろうとしている時に、イガール・アミルという当時25歳の男にピストルで撃たれました。銃撃という衝撃に、国民がニュースに耳をそばだてて間もなく、搬送先の病院で亡くなったという知らせが流れました。

集会があったテルアビブの広場には、何十万人ともいわれる人々が次々と集まり、無数のろうそくに火がともされました。多くの若者たちが暗殺現場で、街頭で、家の前で、自分たちの未来をどうすべきかなどの議論をする姿が、何日も見られました。

このころのイスラエルは、ヨルダン川西岸とガザの占領地を返還してパレスチナ側に自治を認め、やがては国家としてイスラエルとの二国家共存を目指すというオスロ合意をめぐって賛成派、反対派が鋭く対立していました。和平交渉は、治安維持の権限や聖地エルサレムの帰属、パレスチナ難民の帰還権など様々な問題で進展せず、占領地全体の中の限定された自治領域は一向に拡大されないまま。不満を持つパレスチナ側の過激組織による、イスラエルのバスなどを狙った爆破テロが相次いでイスラエル側の世論も硬化していました。

和平反対派のデモが激しさを増し、棺桶をかかげて街頭を練り歩く光景も見られ、治安当局に首相が襲われる懸念を抱かせる雰囲気になっていたのです。

テルアビブでの和平集会に際して、ラビン首相は防弾チョッキを着るよう勧められたものの、同胞に撃たれるなど考えたくなかったからか、首相は断ったと、後に伝えられました。

## 和平つぶしに効果的テロ

首相を撃った犯人は、正統派と呼ばれるユダヤ教徒の家庭に育ち、主に宗教的な理由からパレスチナ和平に反対していました。調べに対し、ユダヤ教の

律法によれば「ユダヤ人の土地を敵に渡す者は殺すべきことになっている」という趣旨のことを述べたそうです。1967年の第3次中東戦争で占領したパレスチナ人が住んでいた土地を返還し、平和共存しようというのが和平合意の目標なのに、西岸は神がユダヤ人に与えた土地であるという旧約聖書の記述を盾に、渡してはならない土地だというわけです。

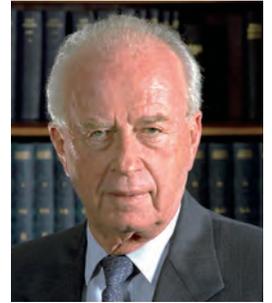
反和平派のイスラエル国民の反対理由は、前述の宗教的なものと、隣にパレスチナ国家ができれば治安を脅かされるというのが主なもの。ラビン首相の暗殺は、和平交渉を妨げたい陣営にとっては結果的に好都合な、まさに政治的テロでした。パレスチナ側の和平反対派が爆弾テロを仕掛けてくるのに対し、それで和平交渉を中断するのでは反対派の思うつぼだと批判をはね返した、腹の座った指導者が消え、強硬な世論に乗って政権を取る政治家が選ばれるようになったのですから。

## 主要国から要人が弔問に

暗殺から2日後の11月6日、ラビン首相の国葬が営まれました。その前夜、遺体が安置された国会議事堂を訪れた人の列は議事堂がある丘のふもとまで延々と続きました。筆者の事務所兼住宅からは谷を挟んだ議事堂周辺の様子や、谷を走る道路を通る外国要人の車列などが見えました。

葬儀には、和平交渉の仲介役を果たしていた米国から現職だったクリントン大統領夫妻や国務長官、元大統領のカーター氏や父ブッシュ氏、それに多くの上院議員などが大挙して訪れた。また、シラク仏大統領や英・独・イタリア・カナダの首相などG7と呼ばれる主要7カ国の首脳（日本からは当時の河野洋平外相）が参列。アラブ諸国からも、いち早くイスラエルと国交を持ったエジプトのムバラク大統領、ヨルダンのフセイン国王（共に当時）も訪れるなど、世界中の要人が顔をそろえました。

そこには、イスラエルとの関係への配慮や中東和



ラビン首相

平に対する姿勢の示し方といった外交的意味合いもあったでしょうが、甲冑外交の場としてではなく、文字通りに故人をしのぶ気持ちで葬儀に参列した首脳も多かったでしょう。クリントン大統領などは、和平交渉仲介での接触を機に、ラビン首相に敬意を含めた親愛の情を抱いていたように見受けられました。

## 任期最長の元首相は被告人

イスラエル国内では、ラビン首相の和平政策に反対し、反発する人ももちろんいました。しかし、政治的には敵視していたとしても、それを暗殺という手段で除くことに衝撃を受けた人は多かったのでしょうか。国葬を巡り国論が二分するという状況ではありませんでした。とはいえ、前述した通り和平交渉を進める首相への反対デモが険悪な様相を強めていた事実が変わりはありません。暗殺を懸念する空気があったからこそ、治安筋は首相に防弾チョッキの着用を勧めたのです。この険悪な空気を反政府集会などでの演説で煽ったとしてラビン夫人などから批判されたのが、野党だったリクードの党首ネタニヤフ氏でした。そのネタニヤフ氏が翌96年6月、新

たに導入された首相公選制の選挙で、ラビン氏の和平路線を継承すると公約したペレス氏に、1%という僅差で勝利したのです。

ネタニヤフ首相が率いるリクードを軸にした政権は、和平交渉を進展させるどころか、将来のパレスチナ国家の領土となるべきヨルダン川西岸のユダヤ人入植地の拡張を進めるなどの政策をとりました。ネタニヤフ政権は96～99年、2001～06年、09～21年と5次にわたり、首相在任期間は通算15年。最長を記録したのです。その元首相は収賄、詐欺、背任の罪で訴追され、被告人の身となっています。

ところで、イスラエルでは11月1日に総選挙の投票がありました。2019年4月以来、3年半の間で実に5回目の総選挙でした。各政党の得票率に大きな変化は見込めず、新政権作りの交渉が難航するとの予想が多かったのですが、結果は反アラブでユダヤ色を強調する宗教的極右を含む右派が国会議席（定数120）の過半数を制し、ネタニヤフ氏の首相復帰が確実となりました。パレスチナ和平の進展は望めないどころか、暴力の応酬の激化が懸念されています。

## コーヒーだより

聖地の子どもたちのためのコーヒー募金、おかげさまでご好評をいただいております。リピーターも増えています。ドリップパックだけでなくお得な粉コーヒーもというご要望に応え、今回事務局近くにあるカフェ ITSUKI Coffee Roasteryのご協力をいただくことになりました。

イエメンのコーヒーは今でも昔ながらの伝統的な製法で細々と作られています。標高2000mを超える高地で栽培されたコーヒーの果実を天日干しにした後、皮を取り除くので、豆の方にも果実の甘い香りが残ります。

カフェのオーナーである阿部さんの勧めで、このコーヒーの持つ酸味を残しつつ芳醇な甘い香りをさらに引き立てるために、時間をかけて浅煎りしてみました。いかがでしょうか？ ぜひお試しください。ご感想、ご意見をいただければ幸いです。



イラク・シリア・パレスチナ「子どもたちの戦争と日常」展に参加しました！

9月21日-10月10日に東京・赤羽の青猫書房で開催された展覧会に当NPOからも、聴覚障害児のための「エフエタ学院」（ベツレヘム）の子どもたちの絵を展示いたしました。会場では、コーヒーを販売させていただきました。



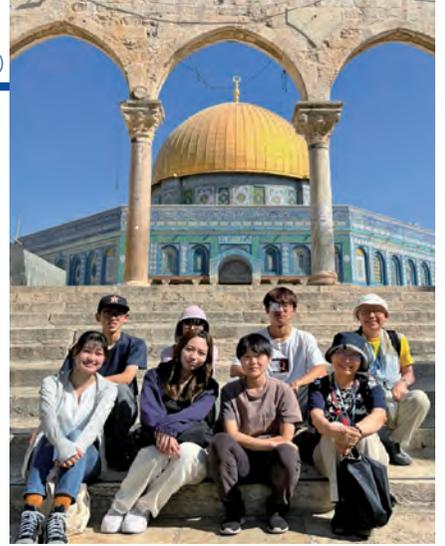
飲んで聖地の子どもを応援  
イエメン産・粉コーヒー  
100g 2,160円(税込み)

←こちらから申し込みます

# スタディ・ツアー2022特集です



ヘブライ大学日本語学科を訪問。  
教授、学生たちとの「平和構築」ディスカッション。(エルサレム)



イスラム教の聖地ハラム・アッシャリフにて。  
(エルサレム)



ノートルダムセンターでのフレンドシップ・ミーティング：イスラエル人、パレスチナ人、日本人、そしてウクライナ人も！(エルサレム)



親戚も集まって、ガザウィ家での食後の一時(エルサレム)



テラ・サンクタ学院を訪問。(エルサレム)



ラサール校の小学校5年生、日本のお兄さんお姉さんたちとの別れを惜しんだ。(エルサレム)



パレスチナ自治区：ジェリコの副市長(右端)を訪問。



イブラヒム神父と19年ぶりの再会。当時来日していたイブラヒム神父の祝福を受けた三島陽君。



死海で楽しむ参加者たち。気温は46度越え！

写真撮影 福島 貴和、三島 陽